2013 年 12 月 16 日

博士学位論文審査報告書

大学名	早稲田大学
研究科名	人間科学研究科
申請者氏名	藤井　紘司
学位の種類	博士（人間科学）
論文題目	琉球弧・八重山諸島における先祖祭祀と農耕儀礼 Ancestor Worship and Agricultural Rites in the Yaeyama Archipelago of the Ryukyu Arc
論文審査員	主査　早稲田大学教授　蔵持不三也　博士（人間科学）（早稲田大学） 副査　早稲田大学教授　鳥越皓之　文学博士（筑波大学） 副査　早稲田大学教授　谷川章雄　博士（人間科学）（早稲田大学） 副査　早稲田大学教授　矢野敬生

本論の目的は、沖縄県八重山諸島における生業や「絶家」、旧盆民俗などを通して、先祖祭祀や農耕儀礼を文化人類学や民俗学の視座から再検討するところにある。周知のように、我が国の沖縄学はこれまで膨大な先行研究がある。筆者はまず「序論」でその先覚者である柳田國男や折口信夫、伊波普猷らの他界観・神観念に基づく民俗学的な業績、さらに比嘉政夫や牛島巌らの文化人類学的な構造論的アプローチを紹介したあとで、「外圧が加われば加わるほど、自己の内面に潜在化した価値観が抽き出される」とする民俗学者坪井洋文の指摘に着目し、歴史的にさまざまな制約を受けてきた、そして今も気候風土の制約を受けている沖縄社会における人々の生活戦略を、数年かけて行った現地調査に基づく膨大な資料と知見を駆使しつつ論じる。

「農と海上の往来」と題した第 1 章では、海域世界、とくにオセアニアにおける文化生態史を、M・D・サーリンズ（1984 年）をはじめとする文化人類学的研究から説き起こす。そして、これら先行研究がどちらかといえば「単数の人間＝自然系を自己完結的に分析する傾向」にあり、「複数の人間＝自然系同士の相互関係に対する視座は不十分」とする B.S.Orlove（1980 年）らの指摘を引き受ける形で、先島地域の自然環境や居住形態、疫病の蔓延、水資源の確保といった生活・生態史を多くの文献渉猟や古絵図などによって論じ、その上で、鳩間島をはじめとする「低い島」から「高い島」――こうした概念は広くポリネシアにも見られる――の西表島での出作り、著者の造語によれば「通耕」の実態をじつに詳細に分析する。これは自然的・歴史的環境に恵まれない島民の「水平統御」的な生活戦略といえるが、そこでは、稲や粟を満載した舟々が往来するさまを歌った鳩間節からも分かるように、「低い島」の住民たちが「高い島」で水耕や共同牧場、さらに水資源不足を

補うための池沼や宅地などを共同所有・利用している生業活動の有り様が克明に記述されてもいる。著者によれば、こうして「卓越した操舟術を培いつつ、自然環境及び利用できる生態資源の偏在に対応し、農耕民の往来する“海上の道”」が形作られてきたという。

「来夏世（くなつゆ）論」という副題を付した第 2 章の「農の作法とまつりの契機」では、自然環境とのかかわりのなかから生まれる世界報「農の稔り」を実現させるための作法に注目し、とくにまつりの場における「シラ（穂積み）」に似せた造形物やまつりの囃子、されにそれと関連する芸能の身体表現を取り上げている。柳田・折口説ではシラを新嘗と結びつけているが、筆者は八重山諸島の「種子取祭」を現地調査し、シラの上に置かれる握り飯（イバチィなどと呼ばれる）の包みが、折口のいう「たまを宿すかひ」としてだけではなく、竹富島や多良間島などの古謡から、他界からの来訪神、とくにミルク（弥勒）信仰と結びついているとする。さらに筆者は小浜島の豊年祭に、家々の屋敷に上り込んで転がる稲と粟の化身としての「シネヌーハマ」の身体所作が、シネ（「米と粟」）がハマ（「転がる」）という字義からわかるように、豊作予祝を意味すると指摘している。と同時に、八重山諸島の伝統的な農耕暦では、播種籾と結実籾を祀る契機が、世果報を実現するための期間であり、作物の順調な生育を願う心意の表れともする。この章の圧巻は、石垣、小浜、西表、与那国、竹富、鳩間、波照間などの種子取り祭におけるシラとイバチィの詳細な素材比較で、これが論述に十分かつ説得力のある根拠を与えているところにある。

第 3 章の「絶家の民俗」は、副題にもあるように、波照間島における預かり墓と焼香地を調査した成果である。沖縄の「預け預かり慣行」という主題はすでに農業経済学のトピックとしてあり、土地所有者ないし農家構成員が、移民や出稼ぎによって他出する際、他の家族員や親戚に対して行われる無償の使用貸借慣行とされている。だが、著者はこの慣行が「農地の維持・保全の方式」といった家経営の側面だけでなく、波照間島のある家の慣行に着目して、戦災や度重なる津波後の政策などによって絶えざるを得なかった家が、じつは墓や農地（焼香地）を他家に託して潜在的に生きながらえるというメカニズムを鋭く分析している。興味深いことに、この慣行では１軒の家が複数の焼香地や墓（ときに寄せ墓）を預かり、世代が替っても、つまり絶家とは無縁の世代になっても、なお預かり続けるという。登記簿上の正当な所有権者となっても、預かった墓や焼香地を個人が恣意的に処分することができないともいう。著者によれば、「こうした絶家をめぐる習俗は、家の系譜制を一時的に凍結させつつも、“擬制的”なかたちで他家の先祖祭祀に携わっていく実践」だというが、この事実に向き合えば、著者がいみじくも指摘するように、先祖祭祀の基本単位を直系的に存続する家に置く従来の研究は、いちじるしくその根拠を揺さぶられることになる。

第４章の「作法としての先祖祭祀」では、旧盆（ソーロン）の場と生活史が再検討されている。周知のように、今日の沖縄社会では先祖祭祀にかかわる「門中モデル」の規範がスプロール化し、一種の社会問題となっている。このことに着目する著者は、波照間島の古老を中心に聞き取り調査を行い、彼らのライフヒストリーに基づく多様な語りと先祖祭

祀の実態を通して、伝統的な先祖観や他界観、家祭祀観などを析出する。「正統的」な親族体系としての規範（出自的規範）を有する門中モデルの「系譜の論理」――他系の者が先祖祭祀に関わる「タチー・マジクイ」や、嫡子以外が祭祀を担う「チャッチ・ウシクミ」、さらに兄弟の位牌が同じ仏壇に並ぶ「チョーデー・カサバイ」を禁忌とする論理――とは別の論理、つまり、たとえば「近親ボトケ」という概念とそれに対する祭祀での働きかけに象徴されるような、祀るものと祀られるものとの経験を基にする「生活史的規範」による祭祀も実際に営まれており、その 2 通りの論理の相克が沖縄の先祖祭祀を特徴づけるものだとする。

最後の「結論」では、当然の手続きとして、第 4 章までの論述をまとめるとともに、改めてミルク信仰を取り上げ、より広い視点から、こうした沖縄の来訪神信仰をアジア・太平洋地域におけるメシアニックかつユートピア志向的な「カーゴ＝カルト」と結びつける。前述した古謡に見られるように、他界から富や幸福をもたらす来訪神を先祖とみなす思考を、単に沖縄の社会や文化にとどめるのではなく、より広闊な視点で見ていこうとするきわめて大胆な作業的仮説である。

各章ごとに先行研究の成果と問題点を簡潔かつ適切にレビューしながら、著者自身の現地調査によるデータによって沖縄文化の深層に入っていく。その文章はなかなか硬質であり、徒に先学たちの言葉を多用するのではなく、自らの用語を作り出す手法もまた、章末に挿入した、それだけで論文としての十分価値を有する補足資料や補論ともども、学術論文として評価できる。たしかに「低い島」住民の高度だという操舟術に対する考察や論旨の一貫性に多少の瑕疵が認められこそすれ、各章の考察と論述はそれぞれ見事な展開と説得力を示しており、琉球弧の複層的ないし重層的な社会・文化の有り様を多角的に析出している。さらに、沖縄文化を環太平洋的な枠組みから再検討しようとする結論部の言挙げも、これからの著者の方向性を示していて好感がもてる。本論文が斯界に貢献する可能性は決して小さくないはずである。

以上のことに鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認めるものである。

なお、本論文（一部を含む）が掲載された主な学術論文は以下の通りである。

【１】藤井紘司「琉球弧・八重山諸島における通耕実践と生態資源利用――19 世紀末期から 20 世紀初頭における“高い島”と“低い島”との往来をめぐる事例」、国立民族学博物館研究報告、vol.38, no. 1、2013 年（印刷中）。

【２】藤井紘司「近代八重山諸島における遠距離通耕の歴史的展開」、地理学評論、vol. 83, no. 1, pp. 1-20、2010 年。

【３】藤井紘司「花とイーヤチー――沖縄県竹富島の種子取祭にみる粟と米の盛衰」、蔵持不三也監修『医食文化の世界』所収、pp. 121-133、早稲田大学国際医食文化研究所、2010 年。

以上